

Quality assurance for HOSEI

法政大学総長室付大学評価室 <http://www.hosei.ac.jp/hyoka>
No.11 通巻11号 2012年10月発行

研究所の自己点検活動を実りあるものに

研究開発センター担当常務理事 福田好朗 1

2012年度 大学評価結果(学部等・大学院・研究所) 2~3

シリーズ「学士力の質保証を考える」対談(第3回): 学生参加型の取り組みと問題発見・解決・表現力

大学評価室長 公文博 ※ 経済学部長 菊池道樹 4

2011年度 卒業生アンケートの結果から 5

活動報告／編集後記 6



研究開発センター担当常務理事
福田 好朗

MESSAGE 1

研究所の自己点検活動を 実りあるものに

自己点検が現在の形になって四年が経つ。大学の重要な機能のうちのひとつである教育に関する自己点検活動は、自己点検、学部長懇談会を通じた学部間の相互理解、問題解決の指標化など実質的な活動が行われてきている。しかしながら、もう一つの機能である研究に関しては、なかなか実質化がされていない。法政大学では、学則附置の研究所が11、法人本部所属の研究センターが7、合計18の研究所と研究センターがある。これらの研究所でも、自己点検を実施し、学内の評価を受けているが、研究所間の比較、相互理解、研究所固有の指標化など自己点検を通じた活動の制度化が教育機能のそれと比較

して遅れている。研究所は、それぞれ規模も異なり、使命も、分野も異なり、運営形態も異なっており、なかなか相互の比較や問題点の共有は困難であるが、せっかく行っている自己点検活動を実りあるものにしていく機会になればと思っている。また、競争化とグローバル化の中で、大学が果たすべき役割や求められるものが変わってきている。当然、大学の研究所に対する役割や求められるものも変化してきているが、幸いにも今は、教育ほど外圧にさらされることはない。こんな時こそ、自己点検を通して、法政大学の研究機能の中での研究所の役割を明確にして、より強固な研究基盤を作っていければと思っている。

2012年度 大学評価結果（学部等・大学院・研究所）

公文委員長が総長に報告



大学評価委員会では、本年5月より学部等の評価を進め、その結果を7月25日の常務理事会に「大学評価報告書（教学部門）」として提出しました。ここでは、その中から、公文大学評価室長による総評を抜粋して掲載します。

2012年度自己点検・評価活動（学部等・大学院・研究所）の総評

大学評価委員会委員長 大学評価室長 公文 溥

1 2012年度の指摘事項

今年度は、学部等による自己評価の項目を5つ（教育課程・教育内容、教育方法、教育成果、教員・教員組織、そして内部質保証）に絞って実施しました。その中から、大学評価委員会が高く評価した施策や取り組みを紹介します。

(1) 教育課程・教育内容に関して

学科等のあり方を再考するなかから、カリキュラムの検討を行っている学部が複数あり、カリキュラム改革の進行を確認できた。また、GISがカリキュラムの順次性を担保するべく科目を100番台から400番台までに分類し、科目区分を明確に設定していることは評価できる。国際的に通用する人材の育成にかかわる措置についても法学部のHOPや、国際文化学部のSAプログラムをはじめとして優れた施策が実施されている。

(2) 教育方法に関して

大規模大学においてはきめ細かい教育方法を実施することは容易ならざる課題だが、そんな中でも注目すべき施策を確認できた。文学部において1年次前期に実施している個人・グループ面談等は評価できる。国際文化学部における「ブレンド型学習」は、学生の学習時間を確保する試みとして、今後の幅広い展開が期待される。人間環境学部では、「フィールドスタディ」を1年生も履修できるようにしたことは評価できる。情報科学部では、ガラス箱オフィスアワーセンターを活用し、専任教員によるきめ細かい学習指導を行っている。生命科学部では、統一テストの実施や専門図書に関する学習環境を整備しており、学生の学習を促す措置として評価できる。またスポーツ健康学部では、前年度の「必修科目」について「専門知識習得度テスト」を行い教育成果の検証をしている。理工学部では、「授業改善アンケートとGPAのクロス集計」を行っており、アンケートの利用方法として評価できる。

各種アンケートにおいて満足度に低い傾向が見られた経済学部が、「カリキュラム改善のためのアンケート（2年生）」を実施し、教育方法の改善に必要な情報を収集するとともに教授会メンバーで共有化する措置を取った。そうした努力が実り、満足度が向上していることは、最大数の学生を抱える学部が客観的に不利な条件の克服を図るものとして評価できる。

(3) 教育成果に関して

いくつかの学部では教育成果の確認を行う具体的な評価方法を実施している。現代福祉学部では、基礎演習・実習科目において学力到達レベルを設定し、目標の達成状況を成績評価の際に確認している。国家試験にかかわる実習等の科目については学外の実習指導者からの評価を受けており評価できる。キャリアデザイン学部では、学部で開発した成果の測定・評価を行うためのCareer Vision and Action Testを体験型科目の一部で利用し、成果の検証をしている。理工学部ではGPAの学科別分布、必修科目の不合格者統計、TOEICの利用などを行っており学習成果を測定する作業として評価できる。生命科学部の生命機能学専修においては、取得単位数の少ない学生に対して学習指導を行っており評価できる。

(4) 教員・教員組織について

教員組織に関しては、新規採用の際、大学院の充実が必要なことを考慮したとき、学部教育ばかりでなく大学院の担当を考慮することが必要であろう。その観点から見たとき、経営学部の施策は評価できる。すなわち教員の募集要項に、大学院を担当することを明記しており、専門教育科目の専任教員（准教授以上）は原則として全員が経営学専攻の専任教員となること、また学部教員の採用基準として博士の学位取得またはそれと同程度以上の研究業績があること、を明記している。

(5) 内部質保証について

学部においては質保証委員会を設置し、いわゆるPDCAのうち、学部執行部がPDを担当し、質保証委員会がCAを担当することになっている。大学評価委員会による評価は前期中に終了するので、後期には学部においてその評価を教育活動に生かすことが望まれる。社会学部は教授会議議の大項目に「質保証関連事項」を掲げることにしている。これは質保証委員会の報告、指摘を教授会に遅滞なく伝え、議論を喚起する措置といえる。デザイン工学部都市環境デザイン工学科は、外部の評価機関であるJABEEによる評価を受けており、教育の質の向上を図る試みとして評価できる。

(6) 大学院の質保証委員会について

今年度は、大学院において質保証委員会の設置を依頼した。大学院の質保証と向上は今後の重要な課題である。

(7) 研究所について

今年度、研究所の研究活動に関する現状分析において、①研究・教育活動の実績、②対外的に発表した研究成果、③研究成果に対する社会的評価、④外部者による研究所の評価、そして⑤外部資金の応募・獲得状況について、自己評価を記載することにした。なお抽象的な記述となっている評価があるので、今後、具体的な評価を通じて理事会が研究所の在り方を検討するなどし、特に優れた研究成果を確認できる研究所については配慮をするべきであろう。

2 今後改善が望まれる点

(1) 教育課程・教育内容に関して

学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性、体系性を可視化することそのための検討を行うことが望まれる。

(2) 教育方法に関して

学生の学習時間（予習・復習）を確保するための履修指導や講義方法の工夫が必要である。また学生がカリキュラムに即した学習を行った際の成果を検証する方法を開発することが望まれる。

(3) 教育成果に関して

各学部において学習成果を測定する指標を明確にし、学生と教員の双方が教育成果を確認できるようにすることが望まれる。

(4) 教員・教員組織に関して

大学院の充実が今後の課題であることを考慮したとき、専門教育科目の教員の新規採用に際して、大学院担当を明確に意識した採用方法を考慮する必要がある。

(5) 内部質保証に関して

学部執行部と質保証委員会による教育研究活動の質保証のサイクルを担保すること、大学院研究科は質保証委員会を設置することが課題である。

3 おわりに

今年度の大学評価委員会の活動は、評価を通して学部等の教育と研究の質保証を支援するという方針のもとに実施しました。この方針は、過去3年間の評価活動を通して大学基準協会の要請する基盤評価（法令遵守）の項目はほぼ満たしたと、そして達成度評価にかかわる項目の充実が課題になったことを考慮して、本学の評価システムの高度化を狙ったものです。今後も、学部等が、社会的課題を考慮しつつ教育と研究の質的進化を果たしてゆくには、自己評価とともに大学評価委員会による評価の2段階構えの評価システムが必要です。

2012年度自己点検・評価活動

—どの港へ向かうのかを知らぬ者にとっては、いかなる風も順風たり得ない—

自己点検委員会副委員長・国際文化学部長 鈴木 靖

「我々の計画というのは、目標が定かでないから失敗に終わるのだ。どの港へ向かうのかを知らぬ者にとっては、いかなる風も順風たり得ない」とは、古代ローマの思想家セネカの言葉ですが、昨年度の学部学位授与式で、この言葉の意味を痛感する経験をしました。法学部や文学部のような伝統学部とは異なり、国際文化学部のような新設学部は、学部名を言っただけでは、何を学んだのかよくわかりません。そこで、卒業生が社会に出た後、学生時代に何を学んだのかを自信をもって言えるよう、祝辞の中で学部の教育目標である「国際社会人」とは何かについておさらいしてみました。すると、式の後で卒業生の一人からこんな言葉をかけられました。「この学部がめざしていたのは、そういうことだったんですね。これを入学の時に聞ければよかったのに」。自己点検・評価活動を通じて、私たちは組織的・計画的・継続的な改善活動を行っています。しかし、その一方で、私たちがそもそも何をめざしているのかを、教職員・学生の間で明確にし、共有することも大切なのではないのでしょうか。

2012年度大学評価委員会委員および評価員

I. 大学評価委員会委員

区 分	氏 名	所属学部等
委員長	公文 溥	大学評価室長
副委員長	大山 博	現代福祉学部教授
委 員	浜村 彰	大学評価室担当常務理事
	大野 達司	法学部教授
	坂本 勝	文学部教授
	大山 博	現代福祉学部教授
	絵所 秀紀	経済学部教授

委 員	前 川 裕	国際文化学部教授
	八 名 和 夫	理工学部教授
	吉 田 長 行	デザイン工学部教授
	清 水 敏	早稲田大学常任理事
	新 井 康 廣	元私立学校振興・共済事業団監事
	生 和 秀 敏	大学基準協会特任研究員
	松 原 康 雄	明治学院大学教授
	吉 野 政 美	監査室長

II 評価員（評価の実務を行う方です）

氏 名	所属学部等
細 井 保	法学部教授
奥 田 和 夫	文学部教授
藤 田 哲 也	文学部教授
藤 沢 周	経済学部教授
湯 前 祥 二	経済学部教授
白 鳥 浩	社会学部教授
田 嶋 淳 子	社会学部教授
鈴 木 武	経営学部教授
小 池 康 郎	国際文化学部教授
堀 上 英 紀	国際文化学部教授
須 藤 祐 二	国際文化学部専任講師
長 山 恵 一	現代福祉学部教授

小 池 誠 彦	情報科学部教授
八 幡 成 美	キャリアデザイン学部教授
西 岡 靖 之	デザイン工学部教授
渡 邊 眞 理	デザイン工学部教授
江 崎 和 博	理工学部教授
小 林 一 行	理工学部教授
村 野 健太郎	生命科学部教授
藤 重 博 美	グローバル教養学部准教授
山 口 芳 江	総長室主任
小 澤 雄 司	通信教育部事務部通教事務課長
星 崎 亨 子	キャリアセンターエクステンションカレッジ事務課長
日 野 好 幸	情報技術 (IT) 研究センター課長

シリーズ「学士力の質保証を考える」対談（第3回）： 学生参加型の取り組みと問題発見・解決・表現力

公文 溥 [大学評価室長] × 菊池 道樹 [経済学部長]

各学部における教育の質保証に向けた取り組み・成果について、大学評価室長と学部長との対談形式でお伝えするシリーズ「学士力の質保証を考える」の第3回目です。今回は、経済学部長の菊池道樹教授にお話を伺いました。

✦「経済学部カリキュラム改善のためのアンケート（2年生）」の実施

公文 経済学部では大学評価室の学生アンケート結果を受け、2011年度に「カリキュラム改善のためのアンケート（2年生）」が実施されたと伺いました。学部が実施する教育改善の試みとして大変注目しています。

菊池 ここ数年、経済学部は学部の満足度が全学で最下位になっています。多くの学生が授業に不満を抱えていることがわかったわけですから、大学教育に携わる立場としてそれを放置するわけにはいきません。本調査は大学評価室のアンケートよりもさらに一步踏み込んで、学生たちが具体的にどのような点に不満を持ち、どのような改善を望んでいるのかを知るために実施しました。



菊池経済学部長

公文 調査によってどのようなことがわかりましたか。

菊池 満足度については複数の多様な要因が絡み合っているとは思いますが、まずは経済学部の学問体系に要因があるかと思っています。経済学の基礎には「マクロ経済学」「ミクロ経済学」があり、これらの抽象的な理論をしっかり習得しないと先に進めないようになっています。入試で数学を選択しない経済学部生にとっては難解で、一方的な講義ではついていけない学問です。教員はそれを踏まえた上で、授業方法や科目配置について考えなければならない。どうしたら基本部分をしかも興味深く教えられるのか。年度ごとの積み重ねであろうということで、その出発点を確認したというのが現状です。

また、本学部は学生数が多く大教室の授業が中心となっていますが、学生は一方的な授業ではなく、問題発見・解決力を培う総合的な参加型授業を求めていることを痛感しました。大教室の科目で学生個人を認識するのは難しいので、少人数のゼミで個々の学生をケアしたい。今年度のゼミの登録率が2～4年生全体では6割台と低いので改善する必要があると思います（但し、2年生に限ると78%と改善）。それには1年次の入門ゼミで動機づけをするのが有効かと思っています。これまで入門ゼミは40名のクラス規模でしたが、今年度から現代ビジネス学科で20名規模に改善しました。学生の評判もよいので、今後、他学科にも広げていきたいと考えています。

✦学生参加型の「ディベート大会」「学生研究報告大会」「プレゼンテーション大会」

公文 最多学生数を抱え教育上の難点も多いかと思いますが、特に工夫している取り組みはありますか。

菊池 学生の自主学習への取り組みとして、「ディベート大会」「学生研究報告大会」「プレゼンテーション大会」を実施

しています。これらは経済学部学会内に設置された経済学部学生会が運営する取り組みで、教授会承認の公式イベントです。

6月実施の「ディベート大会」は、各回で論題を定めてゼミ単位で論戦し、優勝を決めるもので、今年度の決勝戦のテーマは「原発廃止の是非」。両者が肯定・否定の両方の立場から議論できる入れ替え戦を実施し、学生のディベート能力向上に役立てています。

10月の「学生研究報告大会」は、学生による日頃の研究活動の成果発表の場として開催しています。昨年度は「経済理論」「経済政策」「国際経済」「ビジネス」「文化・社会」の6ジャンルに分かれ、35の個人・ゼミを中心としたグループによる報告が行われました。教授陣と大学院生がコメンテーターとして参加し、中には学会発表形式を意識した報告や英語での報告など高度なものがあり、学生同士の良い刺激の場になっています。

12月に実施する「プレゼンテーション大会」は勝ち抜き形式で、決勝チームは百周年記念館にて日頃の研究成果をプレゼンテーションします。専任教員が審査員を務めており、シリーズのハイライトとなっています。

これらのイベントに参加するゼミは熱心だということで、学生のゼミ選択の1つの要素にもなっています。また、全学の懸賞論文では多くの経済学部生が最優秀賞や優秀賞を勝ち取っています。我々の取り組みの成果かと思っています。

公文 大きな成果ですね。大変有意義な取り組みかと思います。

✦経済学部が考える中長期的な教育成果とは

菊池 こういった表現力、プレゼンテーション能力は就職活動にも役立つのか、経済学部の就職実績は全学的に見ても良好です。難易度の高い内容やただ覚えさせる教育だけを行えばよいわけではなく、問題発見・解決力を培う学生参加型の取り組みなど、学生が納得して受け入れる教育を行うことが必要なのでしょう。郊外型の多摩キャンパスは、通学時間の問題など、時に立地がハンディとなることもあります。教育内容やゼミなどで法政大学の良さを実感してもらいたい。そのためには我々の不断の努力が必要です。短期的には就職活動等での成果、中長期的には理論分析による政策提言が可能な人材を育成し、社会に貢献することで教育成果を出したいと考えています。

公文 学部の優れた取り組みがよくわかりました。本日はありがとうございました。



公文大学評価室長

2011年度 卒業生アンケートの結果から

満足度を中心に

大学評価室では、毎年3月に学部卒業生を対象にアンケート調査を実施しています。2011年度の結果から、満足度を中心に紹介します。有効回答数 4998件（回収率：81.9%）

I 法政大学および卒業学部に対する満足度

図1：法政大学に対する満足度 全学 (%)

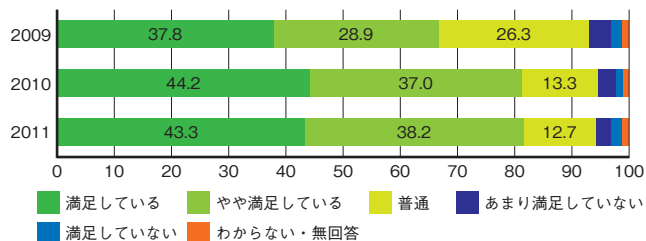
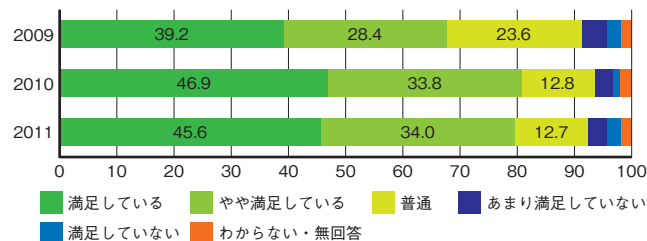


図2：卒業学部に対する満足度 全学 (%)



法政大学に対する満足度（「満足している」＋「やや満足している」の割合。以下同様に表記）は81.5%（2010：81.2%）であり8割を超えました。また、卒業学部に対する満足度も79.6%（2010：80.7%）であり、ほぼ前年並みの水準となりました。

図3：学部別の満足度比較 (%)

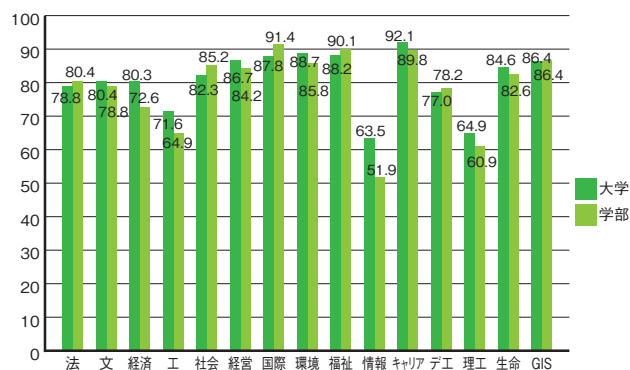
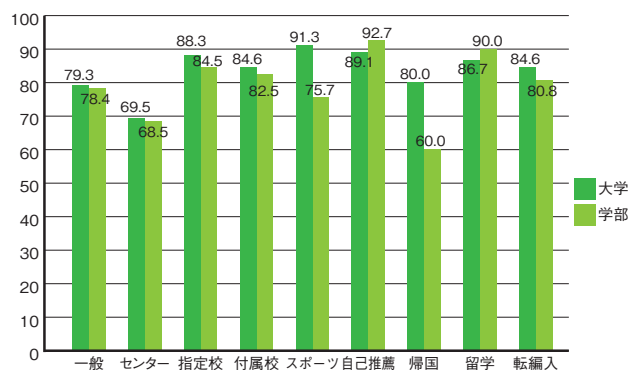


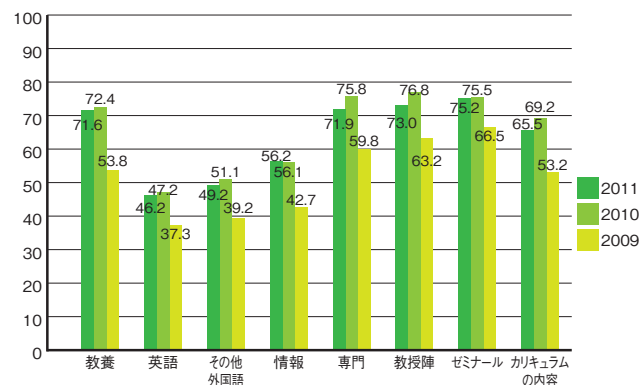
図4：入学経路別の満足度比較 (%)



入学経路別では、人数の少ない帰国生、留学生、転編入生を除くと、大学満足度は、スポーツ推薦（91.3%）が高く、センター（69.5%）が低くなっています。また、学部満足度では、自己推薦（92.7%）が高く9割を超えています。

II 教育内容への満足度

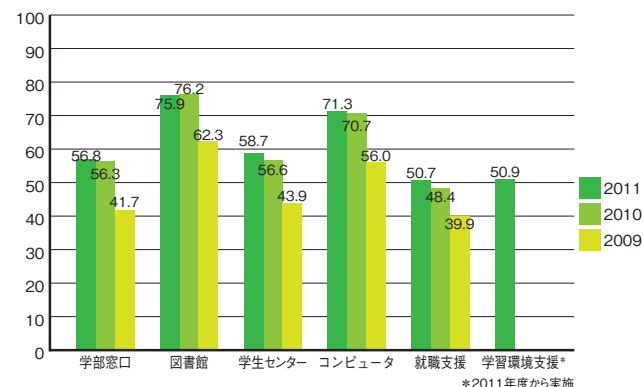
図5：教育内容への満足度 全学 (%)



全項目の満足度について、前年並みもしくは若干低下しました。

III 大学のサービスや施設、設備への満足度

図6：各種サービスの満足度 全学 (%)



図書館サービスは高い満足度を維持しています。なお、就職支援は今回初めて5割を超えました。

アンケートの詳細については、大学評価室にお問合せください。



学部自己点検懇談会を開催しました。

日時：2012年5月31日（木） 15：00～17：30 場所：九段校舎3階 遠隔講義室2

自己点検活動に関する情報交換を目的に毎年開催している学部自己点検懇談会を開催しました。今回のテーマは、「各学部の将来ビジョン、2012年度の重点目標」です。

冒頭、増田壽男総長による「本学の将来ビジョン」の挨拶に引き続き、15学部および教育開発支援機構が、それぞれの抱える課題や今後のビジョン等について発表を行いました。なお、当日は、役員をはじめ、付属校管理職、後援会役員、大学評価委員会委員、事務職員など多数の皆様にご参加頂きました。

次回は2013年1月頃の開催を予定しております。

第12回大学評価室セミナー「九州大学における評価・IRの取り組み」

日時：2012年6月11日（月） 15：00～16：30 場所：ボアソナード・タワー 26階A会議室

今回の大学評価室セミナーでは、九州大学大学評価情報室副室長の関口正司教授をお招きし、「九州大学における評価・IRの取組」についてご講演頂きました。九州大学は、大学評価やIR (Institutional Research) で先進的な活動を行っています。セミナーでは、中期計画と年度計画の関係や大学全体と各部局間の目標連携、ファクトブックの仕組み、IRの考え方などについて具体例を交えてお話頂きました。教職員併せて30名を超える参加者があり、終了後のアンケートでは、大変参考になったとの意見が多く寄せられました。



2012年度自己点検・評価報告書（教学部門）を刊行しました。

2012年度の自己点検・評価活動の成果をまとめた「2012年度自己点検・評価報告書（教学部門）」を刊行しました。各学部等の自己点検結果、大学評価委員会の評価結果を記載しています。例年は年度末に発行していましたが、評価活動が前倒しになったことにより、今年度は約半年早くになっています。報告書は各運用単位の責任者に配布したほか、大学評価室ホームページでも公開しています。後期からの質保証活動での利用が期待されます。

2012年度新入生アンケートを実施しました。

6月中旬から7月上旬にかけて恒例の新入生アンケートを実施しました。調査結果は次号で報告します。

第2回法政卒業生大学評価アンケートを実施しています。

7月中旬から9月31日まで法政卒業生アンケート調査を実施しています。本調査は、卒業後3年（2009年3月卒）および10年（2002年3月卒）を経過した学部卒業生全員を対象に、満足度や大学で身につけたこと等について尋ねるもので、2010年度に引き続き2回目の実施となります。調査結果は次号で報告します。

10月25日・26日に認証評価実施調査が行われます。

本学では、今年度公益財団法人大学基準協会による認証評価を受審していますが、その実地調査が10月25日・26日に行われます。実地調査では、役員・学部長等関係者との意見交換のほか、学生へのインタビュー、施設・設備の見学等が行われます。教職員の皆様のご協力をよろしくお願いします。



今年は前期中に大学評価が確定し、自己点検・評価活動が終了しました。関係の皆様にはご協力を賜り、誠にありがとうございました。これを各部局の次のアクションに生かしていただけたら、事務局としても嬉しく思います。10月の認証評価実地調査でもお世話になります。

ところで今年は我々も夏に休みをとることができましたので、米国外泊に一人旅をしました。立ち寄った近郊のニューベッ

ドフォードは「白鯨」の著者メルヴィルのゆかりの地。同書は学生時代に米文学の授業で読んだ本です（英文学科卒）。その隣町フェアヘブンには、ジョン万次郎を救助したホイットフィールド船長の自宅跡があり、友好記念館として見学可能。遠い米国の地で少しだけ日本の歴史上の人物に思いを馳せました。

（佛坂）